私だけ

snowman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私だけ

【Ｎコード】

Ｎ５７１４Ｃ

【作者名】

ｓｎｏｗｍａｎ

【あらすじ】

私だけの中に止めておかなければいけない想い。私だけを見てほしいという叶わぬ願い。私だけが知っている貴方が欲しかったの。

（新連載「お前だけ」の対のお話です）

1ページ目

自分がこんなにも人を想うことが出来るなんて思わなかった。

たとえそれが叶いはしないものだったとしても・・・

初恋はいつだっただろう。
そもそも恋をしたことがあったのだろうか。
これまで私の中を行き過ぎていった感情が、すべて薄っぺらなものに感じられる。
初めて会った時の記憶はもうすでに曖昧になってきてしまったけれど。

就職をして初出社の日。
飲食業界に入った私は、まさに男社会の真ん中に落とされたようだった。
金曜日の忙しい夜に、何をしていいのか分からず「はい」と言う返事だけでキョドキョドと動いていた。

そんな中に現れたのが彼だった。

忙しい中「おはよーございます」と言いながらキッチンに入ってきて、すぐにチーフに変わりストーブでパスタを作り始めた。
短髪に髭の生えたその風貌に、少し恐かったのを憶えている。

その後に詳しく聞くと、彼は元々うちの会社の店でチーフをしていたらしく、忙しい金曜日の夜9時から朝の3時まで手伝いに来てくれているそうだった。
初対面の時の少し人見知りな彼も、今は遠い過去の曖昧な記憶の中。

二度目に会ったのは次の金曜日だった。
私以外全員が男の職場で、私の歓迎会をしてくれたのだ。
金曜の仕事が終わった後。夜中の3時も過ぎた頃。
「隣に座れ」と彼に言われ、恐くて逃げてしまった。
これから、どれだけ彼のことを想うかも知らずに。

あんなに恐がっていたにも関わらず、私は彼にすぐに心を開いていた。
仕事では週に一度しか会わないけれど、自分の昼休憩中などに顔を出して「元気か？」と声をかけてくれた。
チーフと上手くいかなくて職場がピリピリしてしまった時も、鼻歌を歌っておどけて空気を和ませてくれた。
私が黙々と仕事をしていると、ちょっかいを出してきて笑わせてくれた。
彼の行動すべてが、上京して慣れない職場で追い詰められていた私を救い出してくれた。

最初は逃げてしまった彼の隣の席も、私の指定席になった。
金曜日、仕事が終われば彼と御飯と御摘みを作って皆で飲んだ。
皆で飲んでいても、私は彼の隣に座っていつも二人で喋っていた。

くだらない話も仕事の相談も全部彼に話した。
お酒を飲むと記憶をなくしてしまう彼。
それでも相談ごとはいつも真剣聞いてくれて、私が間違っていれば叱ってくれた。

彼が大好きでしかたなかった。

歳の離れたお兄ちゃんが出来たと思っていた。

その思いが変化していくことに気付きながら、私は懸命に気付かないフリをし続けた。

決して叶いはしない恋だと分かっていたから・・・

始めて会った時から知っていた。
彼には永遠の愛を誓った人がいること。その人との間に子供もいること。
すべて知っていて、この気持ちには堅く堅く蓋をしようと決めていた。

そんないつもの金曜日。
仕事も終わり始発で帰ろうとしていると、
「今日バイクで来たんだ。お前の分のメットも持ってきたから」と言われた。
嬉しくて嬉しくて喜びを隠し切れずに表現していた。
始めて乗るバイク。
ヘルメットの被り方が分からない私は、彼に被せてもらい後ろに跨る。

たった十分程度の帰り道。
本当にこのままで居たいと思った。
家に着き、御礼を言って部屋に入った瞬間に涙が零れた。

もうダメだ・・・

堅く堅く閉じた蓋が、ガラガラと脆く崩れ落ちる音がした。
この想いを隠し切れない。
それでも自分では認めざるを得なかった想いを彼の前では隠し続けた。
いや…彼はずっと私の気持ちに気付いていて、気付かないフリをしていたのかもしれない。。

2ページ目

彼の行動すべて、私の想いを強くするようなことばかりに思える。

誕生日が迫った金曜日。
「来週の月曜日。誕生日なんですよ～」
と冗談交じりで彼に伝えると
「なんだ催促か？俺小遣い少ないから物なんてやれねぇぞ？」
とその場はサラリと流れた。
お小遣いが少ないのは知っていた。
バイクが大好きな彼は、維持費の為にうちの店にバイトとして手伝いに来ていたくらい。

自分の店ではチーフとして頭に立っているにも関わらず、うちの店に来ている時は
「俺はあくまでバイトでお前が社員なんだから、仕込みでも何でも俺に指示しろ」
と言って決して偉そうな態度をとったことなど無かった。
そんな態度が、余計彼を頼れる存在にしていた。

そして私の誕生日当日。
当然私は仕事で、月曜日だから彼に会うことは無いと思っていた。
開店前の午後４時。
仕込みや皆の賄いを作っている中に彼が現れた。
休憩中にわざわざ来てくれた彼の手には白い箱。
「何か買ったりしてやれねぇけど」
と言って手渡されたのは大きなバースデーケーキ。
当日の朝、早く出勤して自分の店で作ってきてくれたそうだ。

真っ白なケーキの真ん中に、私の名前とｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ　という文字。
胸が一杯になって、この気持ちをどう伝えていいか分からなくて
「凄く凄く嬉しいです。ありがとうございます」
とのぼせ上がったように言う事しか出来なかった。
仕事も終わり、一人の帰り道。
始めて過ごす一人きりの誕生日もちっとも淋しくなくて、彼が作ってくれたケーキをゆっくりゆっくり味わった。

この時感じた。もう止めよう。
好きなら好きでいい。
どうせならこのまま一生片思いでも構わない。
想い合うことは出来なくても、好きでいることは許されるはず。

それがどんなに切ないことか。
私は、底の見えない湖に沈んで往くことの辛さを分かってはいなかった。

3ページ目

私と彼の間には、１５年という隙間がある。
数字にすると途轍もなく永く感じるその距離も、私には見えなくなっていた。
彼はとても若く見えるし、私よりも遥かに多くのことを経験している人としての大きさとチラチラと覗かせる子供っぽい部分に惹かれてしまう。

週に1・2度しか会えないけれど、その僅かな時間で私たちはたくさんの話をした。
酔っ払ってしまうとすべて忘れてしまう彼は、きっと半分も覚えてはいないだろうけど。

二人きりで仕事をする日もあった。
彼も私もお酒を飲まずに素面で話す貴重な時。
その時だった。
とても衝撃的な話をされたのは・・・

「前の彼女とプール行った時さ・・・」
普通に聞いていたけれど、ちゃんと聞いてみると彼は過去に不倫していた。
昔働いてた店のホールの子に告白されて、一度は断ったけれど付き合ってしまったらしい。
「俺ダメなんだ。好きって言われると、自分も何か返さなきゃって思って気付いたら好きになっちゃってさ」

ショックだったのか・・・

今でもあの時の感情は分からない。
キレイ事を並べても、私だってその立場になりたいと思っているということは事実だった。

「まぁ・・・お前に手出したらチーフ（私の上司）に殺されるけどな」

この言葉の方がショックだったかもしれない。
『お前には手出さないから。これ以上好きになるな』
と言われている気がした。

すでに私は飼い犬のように、彼に少しでも構って貰えるように隣でヘラヘラと尻尾を振っているようなものだったから。

そんな中、仕事はあまり上手くいっていなかった。
上司との関係や、急な移動話・・・
どうしていいか分からなかった。
移動してしまったら、もう彼とは会えなくなる。
移動する先はあまり評判の良くない店舗で、彼も「お前をあの店には行かせたくない」と言うほどだった。
それでも上司の言うことには逆らえない。
彼もそれを分かっていて「いつでも相談しに来い」と言ってくれた。

頑張ろうと思った。
でもそれは時を程なくして脆く崩れ落ち。
私は始めて自分が壊れると感じた。

4ページ目

それは突然。
あまりにも突然過ぎてなかなか受け入れられなかった事実。

いつも通りの金曜日。
今日も一緒に仕事をして、新しい職場に移ることへの不安や行きたくないことを話そうと思っていた。
そんな仕込み中に急に電話が入った。
昨日の夜、バイクで事故にあったという。
忙しい金曜日の仕込み中。
上手く状況を飲み込めなくて、私はただただ手を動かし続けるしかなかった。

命には別状はないが、仕事に復帰出来るかは分からない状態だった。
本当にもう会えなくなると思った。
恐くなって、仕事をしている以外の時間が苦しかった。仕事をしていても頭の中には彼がいた。
このままでは居られない。
休日朝起きて、衝動的にお見舞いに行くことにした。
実家に帰ろうと思っていたけど、もうそんなことは二の次だった。
駅の近くのデパートでプリンを手土産に買い、病院に向かう。
足を進めるスピードより心は先走る、彼の顔を見て安心したかった。
着いた病院の大きさに戸惑いながらも急ぎ足で向かう。
受付で病室の場所を聞き廊下を歩いていると、正面から少しだけや

つれた彼が歩いて来た。
私を見て驚いた顔をして
「どうしたんだよ」
と言って戸惑った顔をして、その後小さく微笑んだ。
「お見舞いに来たんですよ」
と私は少しだけ泣きそうに笑った。

そして談話室のような所に行き話し始めた。
事故までの経緯や怪我の具合・私の仕事の話。３０分などあっという間過ぎていた。
時間のことなど忘れたように、私は彼しか見ていなかった。

そこに現れてしまった。
一生会うことなど無いと思っていた相手。彼のパートナーと、その人との可愛い分身。
驚き・悲しみ・恐怖・・・
いろんな感情が一気に押し寄せて、私の時間は一瞬止まった。
「あぁ、来たんだ。嫁さんと息子。
この子はいつも話してたミノリだよ」
奥さんは私の存在を知っていた。彼は「可愛がっている奴が居る」と話していたらしい。
其処から一刻も早く逃げ出したかった。
それでも、苦しくて痛くて仕方ない気持ちを押し殺して
「いつも高井さんにお世話になっております」
と声を絞り出した。
「こちらこそお世話になってます」

まさか奥さんに私の話をしていたなんて・・・

本当に私は彼にとって女では無かった。。

パキッ・・・

何かが私の中で折れてしまった。

その日を境に、私は見事なまでにボロボロと壊れ始めた。
精神状態からくるものなのか、体中に蕁麻疹のようなものが出てまったく下がらない微熱。
仕事を休むことは出来ない為、病院にもなかなか行けない。
顔中にまで出た蕁麻疹が、女として生きることを否定されているように感じて、どんどんと暗い底へと沈んで逝った。
やっと行くことが出来た病院でも、原因は分からず薬すら貰えなかった。
追い詰められることに終着点が見えなくて、家に帰り布団に入っても眠ることも出来ず涙を流すことしか出来なかった。

そして、私が今の店で働く最後の日。
来週から違う店に移動することは決まっていた。
彼が私の店に挨拶に来た。
事故にあったことで、うちの店にも迷惑をかけたという詫びをいれに。
しかも、奥様と二人で・・・
チーフは表に出て二人と話をしていたが、私はキッチンから一歩も出ずに仕込みを続けた。
こんな顔を見られたくなかったし、二人が並んでいるところなど見られる程心に余裕など無かった。
キッチンまで私の顔を見に来た彼と目も合わせず、仕込みを忙しそ

うにし続けた。

どうせならこのまま消えてしまいたい。

もう浮き上がれないところまで、私は沈んでいた。

5ページ目

すべてにおいて限界だった。
新しい店舗に向かう日、出勤中に私は足を止めた。
涙などもとうに枯れていた。
呼吸が苦しくて、立っていることさえ儘ならない。
私は急いで携帯電話を取り出し、会社の一番上の上司に電話していた。

調理の世界はまだまだ男社会で、会社の中でも少し浮いた存在だった私を娘のように可愛がってくれていた調理主任。
「いきなり電話してすみません。お話があるので、お時間作っていただけませんか？」
日頃は忙しくて月に1度か2度くらいしか会うことの無い主任も、私の変化に気付いてすぐに駆けつけてくれた。
主任が来た瞬間、私はボロボロと泣いていた。
弱音を吐く人を失って、誰にも何も言えなかったことが一気に溢れ出した。
「わ…私っ…。もう…ダメです。。」
自分でもいろんなものが止め処無く溢れて、何を言っているのか分からなかった。
それでも一生懸命にそれを伝えたかった。
彼のことを知っている主任にこの気持ちは言えないけど、事故で彼という最大の理解者を失った辛さや不安。
病気になって治るかさえ分からないこの状況で、もう私は此処に居ることは出来ない。
周りから言わせれば、「甘いとか・根性がない」と思われるだろう。
それでもいいから、私は此処から逃げ出したかった。

彼を知っている人・彼の知っている人・彼を思い出すこの場所から消えてしまいたかった。
主任からは「1週間休みをやるから、実家に帰ってゆっくり考えてまた話をしよう」と言われた。

実家に帰り、両親に話したらとても怒られた。
母親は辞めるなと怒り・姉はそんな母親に怒り、病気になった私を心配して帰って来いと言った。
父親は「自分で決めたのならそれでいい。次やりたいことは真剣に考えてやり通しなさい」と言ってくれた。
私は会社を辞めても実家に帰るつもりは無かった。
実家が嫌いなわけじゃない。
ただあまりに愛されて、自分がこの世界でぼんやりと過ごしてしまう気がして恐い。

1週間後。
私の意志は変わらずに、会社・そして銀座という街から去ることを主任に伝えた。
もちろん彼に何も言わず、あっという間に消えた。

そして顔の蕁麻疹を何とかしようと病院に行ったり・化粧品屋さんを回り、そして新しい仕事を探した。

会社を辞めて1ヶ月後。
新しい職場も決めて、顔の蕁麻疹も減りつつあった。
そんな中、新しい仕事から帰ってきた夜の11時頃。
携帯電話が鳴り出した。
ディスプレイには彼の名前。
ビックリして、なかなか出られない。

・・・やっとのことで通話ボタンを押した。
「もしもし…」
「もしもし？俺だけど。お前辞めたってどういうことだよ！」
どこからか聞いてしまったらしい彼からの電話だった。
銀座の街では知り合いの多い彼に、１ヶ月知られなかったことの方が稀だったのかもしれない。
「いやぁ～・・・ちょっと病気になって。限界が来てしまいました」
とどう伝えていいか分からないのをどうにか言葉にした。
「お前なんで一番に俺に言わないわけ？」
まだ彼の勢いは納まらない。
「だって高井さん。事故で大変だったし・・・」
と言い訳を並べる私。
「あのなぁ～言ってくれてれば、俺が主任のところに行ってお前をくれって頼みに行ったのに。。
俺はお前ともっと一緒に仕事したかったんだよ！それをよ・・・黙って消えるなよ…」
泣きそうだった。電話でよかった。
こんなことを直接言われていたら、私は彼の前でみっともないくらいわんわん泣いていただろう。
「私も、もっと高井さんと仕事したかったです」
したかった・・・もう遅かった。
私は新しい仕事を始めていたし、彼の店でも新しい人を雇ってしまっていた。
辞めてすぐに彼に言っていれば、私は今頃彼の隣にいたのに。。
そう思うと胸が押し潰されそうだった。
でもこれは自分で決めたこと、彼の前から消えると…
それでも彼と、彼の店で働くことを想い描いて後悔せずにはいられなかった。

最後のページ

新しいお店は人気のカフェで、スタッフも皆同年代だった。
職場の雰囲気もガラリと変わり、仲の良い男友達も出来ていた。
それでも私は彼を忘れられずに時間ばかり流れていた。

そんな中、店長から「社員にならない？」と言われた。
いきなりだったし、私は社員になることに少し怯えていた。
「また体中に蕁麻疹が出来てしまったらどうしよう」
「今度は失敗出来ない」
そんなことばかり考えて足踏みしていた。
悩んでいればいるほど彼に会いたくなった。
あの電話から半年。
一切連絡は取らずにきた彼に、電話をしようと決めた。
社員になることが決まったと報告しよう。
そしたらもう彼と働きたいとか、そんな願望も捨てられる。
新しい職場で働いて半年。
バイトという立場から、彼の店に行ってしまえるという淡い期待を捨てきれずに此処まできてしまっていた。
「もしもし？ミノリかぁ～どした？」
久しぶりに聞いた電話越しの彼の声。
「お久しぶりです。あのですね・・・今のバイト先で社員になることが決まって、高井さんにはちゃんと報告したくて。。」
少し緊張で声が震えてしまったように思う。
「そっかぁ…おめでとぉ。じゃあ今度飲みにでも行くか」
思いもしなかった誘いは、私の心をフラリと呑み込み約束を交わしてしまう。

もうすぐ誕生日が近い彼に、プレゼントを買おうなどと考えていた。
バカみたいに私の決心など消え去ってしまっていた。
職場で仲の良い男友達を誘い、プレゼントを選びに行った。
そして言われた。
「どうなりたいの？」
その時やっと正気を取り戻した気がした。

そして当日を迎えた。これで最後と心に決めて。

彼の仕事終わり時間に合わせて、私は半年ぶりに銀座の街に着いた。
久しぶりに見る彼のコックコート姿に苦しくなって、口元が緩む。
「お久しぶりです。」
きっと私は今恥ずかしいくらい幸せそうに笑っているのだろう。

仕事を終えて着替えを済ませた彼と銀座の街を歩く。
そしてプレゼントを手渡す。
「もうすぐ誕生日ですよね。プレゼント良かったら使ってください」
さんざん友達を連れまわして、やっとのことで決めた。
出来るだけ持ち歩いてもらえるもの。
アクセサリーだと重い気がしたし、彼は荷物は殆ど持たない人だった。
渡すとすぐに
「お前覚えてたの？開けていい？」
と紙袋を開けだした。中身はシルバーのジッポ。
すぐに使って欲しくて、オイルも買ってお店のお兄さんに入れてもらっていた。
そのことを伝えると、彼はお店に着いてすぐに私のあげたジッポを

使ってくれた。
話す内容といえば、仕事の話・怪我の具合・最近気に入っている子の話・・・
そんなもの。
気に入っている子の話を聞くのは初めてでは無いけど、その立場に自分はなれないのだと思うと悲しかった。
そんな話の中「お前にとって俺ってどんな存在なの？」と聞かれた。言葉に詰まってしまったが、変に間が空いてはバレてしまうかもしれない。
「えぇっと、歳の離れたお兄ちゃんみたいな感じですかね」
となんとか引き攣った笑顔で答えた。

終電間際で、そろそろお別れの時間。
もう来ることもないであろう銀座の街を二人並んで歩いた。
少し会話が止まったその時。
私は口を開いてしまった。。
「今日は、高井さんに会うの最後しようと思って来たんです」
半年も連絡を取っていなかったのに、私はそんなことを言い出した。
「なんで？なんかあったんか？」
と不思議そうに答える彼に私は続ける。
「ずーっとね。好きだったんです。でもね、高井さん言ったら気を使って私に何か返さなきゃって思うでしょう？だから言えなかった。。」
彼は黙ったまま聞いていた。
「半年も経って新しい生活を送っているのに、ちっとも気持ちを新しくは出来なくて。だからね、すごく自分勝手なことしてる。伝えるだけ。これで最後。本当にね、大好きです高井さん。。」
少しの沈黙。
黙ったままだった彼が、私の手を引き抱きしめた。

「お前なぁ。俺がどれだけ我慢してきたと思ってるんだよ。。始めて会った時から危ないと思ってたんだ。
あんまりにも無防備に笑顔を向けてくるから、俺なんかが手出したらお前を汚しちまうだろ」
そう一緒に働いていた時に話していた。
私は誰とも付き合ったことが無いこと。
「高井さんも私のこと好き・・・なの？」
静かに涙が流れてきた。
「あぁ・・・胸が潰れるくらい」
彼の声が震えていた。
「一緒ですね。。」
「そうだな。。」
泣きながら笑う。
そして私は続けた。
「それじゃあ…もし生まれ変わって、また私が女の子で高井さんが男の子だったら・・・彼女にしてくださいね…」

両思いだったとしても、この別れは決まっていた。
来世に夢を託すしか私には術がなかった。
「おぅ。そのかわり巨乳で生まれて来いよ」
と言って、彼は私のオデコに小さくキスをした。
見つめ合い笑いながらも零れる涙。
彼の少し困ったように笑う笑顔が大好きだった。

叶いはしなかった・・・

それでもこんなに人を好きになることが出来たことを嬉しく思う。

きっと彼に出会わなければ、知らずに終わっていただろう。

無理やり結ばれることも可能だったかもしれない。

お互いがお互いを大切に想ったから決めた別れ・・・

次に合う時の為にとっておいた唇へのキスを、来世へ託して。

私は新しい世界に踏み出す。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5714c/

私だけ

2010年10月10日03時44分発行